



- ・ 弁道会
- ・ 随聞会
- ・ 男鹿なまはげ教室 with ふくしま KIDS
- ・ 大槌町慰霊行脚
- ・ 第三十八回曹洞宗青年会東北地方集会「福島大会」
- ・ 住職学研修

「一年を振り返って」

秋田県曹洞宗青年会

会長 鈴木 泰賢



早いもので、会長に就任して1年が過ぎようとしています。「役職が人を磨く」との言葉にすがつて一年間活動を続けてまいりましたが、なかなか言葉通りとはいかず相変わらず頼りない会長ではありますが、どうか一年間、会の運営が滞りなく進められましたことは、一重に会員諸師の御協力と御寺院様の御指導の賜物と深く感謝申し上げます。

現執行部では二年間の研修のテーマを「神仏習合」として活動して参りました。最初の事業となりました弁道会においては、皇學館大学教授の菅野覚明先生より「神道」について、また随聞会においては北秋田市龍泉寺佐藤俊晃老師より「曹

洞宗と神道との関わり」について、住職学研修会においては駒沢大学教授の長谷部八朗先生を御招きし、神仏習合の象徴でもある「修験道」について講習を頂きました。いずれの講習会もこちらの予想を上回る沢山の方に御参加頂き、ほんの入り口ではありますが日本人の宗教観を学ぶ良い機会となったのではないかと思います。

また、七月二十八〜三十日には、昨年に引き続き 福島県二本松市と川俣町の太鼓チームの子ども達を男鹿に御招きし、思いつき海遊びを楽しんでもらおうと「男鹿なまはげ教室」を開催いたしました。幸い当日は天候にも恵まれ、福島ではなかなか出来ない野外での活動も順調に行われ、特に今回のメインイベントともいえる海遊びでは、圧倒される程のほしゃぎ様で、子ども達も存分に男鹿の大自然を満喫することが出来たのではないかと思います。

福島を含む被災地はまだまだ厳しいと言わざるを得ない現状にあります。しかし今回の参加者、特に子ども達には本当

に微々たるものかもしれませんが良い思い出と今後を生きる活力を与えることが出来たのではないかと自負しております。今年の秋にはいよいよ東北地方集会「秋田大会」を迎えます。「神仏習合」という日本人の本質や宗教観を考察する集大成となるような大会を目指して鋭意準備中ではありますが、会員諸師、御寺院様には今後とも当会に対しまして更なるご指導、ご協力賜わりますよう紙面をお借りして伏してお願ひ申し上げます。



第1回目の研修となる
弁道会にて挨拶する鈴木会長

弁道会

日時：六月二十四日(月) 午後二時より

場所：曹洞宗秋田県宗務所・禅センター

演題：「神道と日本人」

講師：菅野覚明先生・倫理学者。元・東大教授、現・皇學館大学

神道学科教授。日本倫理思想史専攻。著書に「日本の元徳」

「神道の逆襲」「武士道の逆襲」など。

今期研修テーマ「神仏習合」に基づき、その研修の第一回目として、「神道とは何か」を知るべく、菅野覚明先生をお招きし「神道と日本人」と題して講義をいただきました。初夏を思わせる晴天の中、四五名の会員が参加しました。



神道は「カミ」を祭る祭祀であるとの説明から、その構造や日本の神について、各国の気候風土による宗教的感覚の違いなどを親しみやすいお話も交えての講義でした。

また、先生は過去に大本山永平寺にて安居修行もされておられ、鈴木会長と一緒に寮舎だったこともあるとのこと、神仏両面から見た現在の仏教者と神道者の性格の違い等についてもお話いただきました。

随聞会

日時：十月二日(水) 午前十時半より

場所：曹洞宗秋田県宗務所・禅センター

演題：「曹洞宗と神道」

講師：北秋田市龍泉寺住職 佐藤俊晃老師(曹洞宗総合研究センター)

客員研究員)

幅広く深い知識をお持ちの老師には「曹洞宗と神道」という演題で道元禪師の神祇信仰・祈祷儀礼、祖録に見られる白山信仰、また庚申信仰などニューモアを交えながらの穏やかな口調でお話しいただき、四三名の会員が耳を傾けました。

「道元禪師の神祇信仰・祈祷儀礼等への批判の文言は多く認めることが出来るが、それは道元禪師が仏祖に対して加護を願うことが無かったというのではなく、様々な事例で仏・菩薩の力、祈祷の加護の力を期待して認めていた。それが当時の宗教者の当たり前の姿であった。」



「『ホウイン様』として地域で親しまれていた県内の修験道寺院では明治政府の廃止令に対応しほとんどが『神社』となった。仏寺は死後の世界・先祖供養、修験寺は祈祷・現世供養として地域での役割が分かれていた。それが無くなったことは地域にとつて痛手ではないか。」との思いも語っておられました。

男鹿なまはげ教室 with ふくしまKIDS

七月二十八日～三十日の三日間にわたり、福島県二本松市・川俣町から和太鼓チームの小学生らを招いての「保養プログラム」企画『男鹿なまはげ教室 with ふくしまKIDS』が開催されました。

昨年は白神山地の麓で新鮮な空気と緑あふれる自然に親しんでもらい、和太鼓を通じての交流が行われましたが、今年は男鹿の海で思いっきり楽しんでもらおうという内容で、和太鼓演奏を通じての住民や観光客との交流や子ども達にとつての自己表現の場となるような企画となりました。

参加した子供たちの感想より

「海水浴がとても楽しかったです。」

(4年 男子)

「海遊びが楽しかったです。外国の人ともふれ合えて、いい経験になりました。」

(6年 女子)

「海で遊ぶ時など、おぼうさんがいっしょ

に遊んだり、ふろに友達といっしょに入ったりしてとても楽しかったです。ありがとうございました。」

(4年 男子)

「海の上に、ポニーにのれてよかったです。」

(4年 男子)

「海に入ったり、ゆうらんせんにのったり、福島ではできないことをいっぱいできたので、とても楽しかったです。ありがとうございました。」

(6年 女子)

「テラナタリウムで、流れ星を見られて良かったです。神話の話を聞いたらおもしろかったので、また、夜空を見上げて星や星座を見つきたいです」

(4年 女子)

「2日目の海水浴、バーベキューなどとても楽しかったです。次にやる時もよんでください。」

(6年 女子)

詳しい日程や様子は秋曹青ホームページでもご覧いただけます。

<http://www.sousei-akita.net/>





織姫太鼓（上）と
和雅美太鼓による演奏（左）
（男鹿「五風」にて）



第三十八回曹洞宗青年会東北地方集会「福島大会」

午後一時三十分からの記念式典、午後三時からの記念事業では第一部玄侑宗久氏の基調講演、第二部玄侑宗久氏と青年僧侶らが語るパネルディスカッション、第三部では、やなせな氏の「いのちを歌うコンサート」が行われました。

期日…十一月十九日(火)
会場…福島県郡山市「郡山ビュ
ーホテルアネックス」



大槌町慰霊行脚

期日…九月十一日(水)
日程…十一時 大槌町吉里吉里
吉祥寺様集合 十二時
旧役場前で法要。導師…
秋曹青・鈴木泰賢会長
慰霊行脚後、吉里吉里海
岸で二時四十六分法要。
秋田曹青六名と岩手曹青合わせ
て約二十名が参加

住職学研修

日時：二月十九日（水）午後一時半より

場所：曹洞宗秋田県宗務所・禅センター

演題：「修験道について―その信仰と形態―」

講師：長谷部八朗先生（駒澤大学教授）

この時期には珍しい晴天に恵まれ、四五名の会員が参加しました。

あまり機会の無い修験道についての講演という事で、「修験道とは」から始まり、山岳宗教や仏教・密教その他の宗教・思想との習合について、また、平安期における修験道の変化やその後の分派と現代の修験道に至る歴史についてもお話し頂きました。



時間いっぱいには講義して頂き、皆熱心に聞き入りました。また質疑応答も活発に行われました。

「修験道について

―その信仰と形態―」を聴講して

三教区 円通寺 近藤俊彦

この度の住職学研修は駒沢大学教授 長谷部八朗先生を講師に迎えご講義をいただきました。今回のテーマは修験道ということで、全く未知のジャンルでしたが、大変興味深く聴講させていただきました。

修験道については、「山伏」「法螺貝」「山岳での厳しい修行」といったイメージだけが先行し、具体的な形態についての知識は皆無でありました。しかし、密教僧・最澄と空海がその源に存在するという点、様々な宗教・思想が混ざり合っており、確立された点は一僧侶としてしっかりと抑えておくべき部分であると感じました。

昨年ですが、秋田県立博物館で催された「霊峰鳥海に祈る人びと」という企画展に足を運ぶ機会があり、そこで各地を遊行して地域に定着した修験者が如何に文化形成に関わっていたかを知ることができました。長谷部先生は、秋田県の「鳥海修験」について非常に関心を寄せられておりましたが、私もここ最近になってようやく、ブナ林や伏流水など

を育む豊かな自然に加え、祭や番楽など独特な修験文化を持つ鳥海山の魅力を再発見したところでした。

地元・西目町からは晴れの日には鳥海山の美しい山容を仰ぎ見ることができます。小学生の頃から度々登山をしておりましたが、今思うとごく自然と修験道の足跡を辿っており、調べてみますと「駒ノ王子（参詣儀礼所）」「水（垢離）ノ薬師」など馴染みの地名や呼び名からも修験の歴史が垣間見られ、さらに興味を深めております。

今期、鈴木会長がテーマとして掲げられた「神仏習合」は、様々な角度から宗教・文化を捉えることができ、また文献等を読んでいると日本人の懐の深さや寛容さ、如何に宗教を抛りどころとしてきたかということが伝わってきます。今回貴重な講義の機会を設けていただき誠にありがとうございました。今後の研修にも大変期待を寄せております。



「神仏習合」をさがして

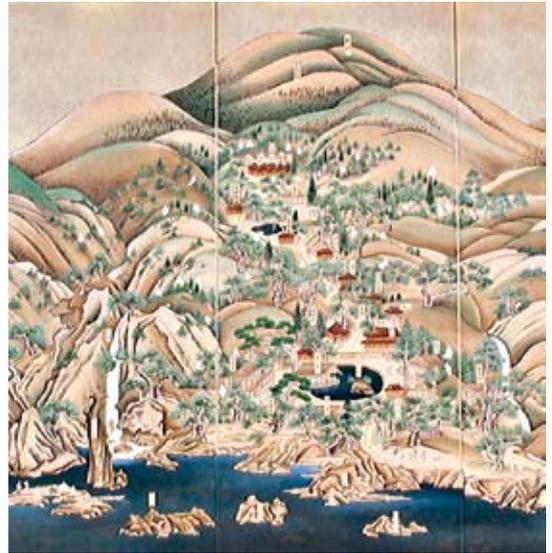
男鹿市 赤神神社五社堂

男鹿といえば「なまはげ」が連想されますが、その「なまはげ」で知られる「真山」、「本山」を中心とした山々は、古くから赤神権現を信仰する聖山として多くの修験者が訪れた地でもあります。

その本山の麓にある赤神神社は貞観二年(八六〇年)に慈覚大師が堂塔を建立し、「赤神山日積寺永禅院」と名付け、赤神権現を祀つたのが始まりとされています。赤神神社はその後、



この地の豪族らによつて寺領の寄進や堂宇の再興が行われるなど、中世を通じて栄え、最盛期には九カ寺四十八坊があつたと伝えられ、江戸時代の紀行家で知られる菅江真澄の文献や江戸期の「領内絵図」、「紙



本地着色男鹿図屏風(秋田県立博物館蔵)からは当時の一大道場であつた様子を知ることができます。

五社堂の呼び名で知られる五つの社殿は赤神権現を祀る社殿を中央に右側から「三の宮堂」「客人権現堂」「赤神権現堂」「八王子堂」「十禅師堂」と横一列に並んでおり、元は比叡山の山王上七社を勧請したものであり、二社が廃れて五社となつたとされています。五つの社殿はいずれも江戸中期の建築で建て替えや修復などの時期が明確であることから秋田県内の近世における社寺建築の資料としても重要であり、平成二年には国の重要文化財にも指定さ

れています。

中央に祀られている赤神権現は漢の武帝であると伝えられ、武帝に連れてこられた五匹の鬼たちは、五社堂へ登つて行く「九百九十九段の石段」を積み上げたとき、なまはげの起源とも言われています。また、右から二番目にある「客人権現堂」には、江戸前期の僧・円空の作である「木造十一面観音菩薩立像」(県指定文化財)が安置されており、普段は公開がされていないため、その姿を拝む機会は限られています。また、この他にも「八王子堂」に二体の観音像が安置されています。

天台宗寺院で始まつた赤神山日積寺永禅院は中世の頃 真言宗に変わり、明治五年の神仏分離令によつて赤神神社となり、最盛期の姿は五社堂とその入り口にある日積寺の堂塔であつた長楽寺を残すのみですが、最近では某女優さんがCM撮影に来たことをきっかけにファンが参拝に訪れるといった話題もありました。男鹿地域の宗教的な歴史を知ることができるところとして訪れてみてはいかがでしょうか。

名 称…赤神神社五社堂

所在地…男鹿市船川港本山門前字祓川三五

お知らせ

○仏法興隆花まつり千僧法要

(全日仏青主催)

期日：四月二十六日(土)

会場：奈良県・東大寺

◇午前十時 アショカピラー 清掃・荘厳

◇午後一時 花まつり千僧大般若転読法要

○全国曹洞宗青年会

四〇周年記念式典 記念講演

期日：五月二十日(火)・二十一日(水)

会場：曹洞宗檀信徒会館

記念講演：青山俊重老師(愛知専門尼僧堂堂頭)



主催：全国曹洞宗青年会

○東北管区 傾聴研修会

(全曹青主催・四〇周年記念行事)

期日：六月二十五日～二十六日

場所：福島県福島市 ホテル辰巳屋

◇研修概要

- ・六～八時間程度の基礎的な研修プログラムを行います。
- ・実地研修や、外部より特別講師を招いての研

※式典案内パンフレットより

全国曹洞宗青年会は昭和五〇年に発会し今

期で創立四〇周年の節目にあたります。この四

〇年の歴史のなかに刻み込まれてきた先輩諸

老師の精進と智慧への感謝と、当会がより社

会に資する団体たるべく、この四〇周年を更な

る会発展の機縁とするために記念式典を執り

行います。今期は「繋がる想いが未来を拓く」を

スローガンとし、過去と今を繋げ、未来を拓く

契機となる様祈念申し上げ、本記念式典の案

内とさせていただきます。先輩諸老師、会員宗

師の皆様方におかれましては、諸事多端とは存

じ上げますが、何卒ご参集いただきます様、伏

してお願い申し上げます。

全国曹洞宗青年会 会長 櫻井尚孝

修を行います。

○第三十五回

日本山岳修験学会

鳥海山学術大会

主催：日本山岳修験学会

・同第三十五回鳥海山学

術大会実行委員会

期日：九月十三～十五日

主会場：由利本荘市

文化交流館「カダレ」

※住職学研修・長谷部先

生からの紹介です。

※今秋に東北地方集會

「秋田大会」(十月下

旬頃)が計画されてお

ります。

後日ご案内申し上げます。

ます。ご理解ご協力賜

ります様お願い申し上

げます。

編集後記 総会後の1年分の研修をまとめた内容での刊行となりました。研修の中から日本人らしさというものは、多分に宗教的な影響を受けていると感じます。今後の研修からも日本人らしさの元ネタが発見できるのでは、と期待しております。

曹青秋田 第76号

発行 能代市字仁井田白山13 倫勝寺内
秋田県曹洞宗青年会

発行責任者 鈴木 泰賢

編集責任者 奥山 一英

秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>